様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １５ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ００３３１

研究課題名（和文）懐風藻の注解に基づく上代日本の文筆活動の研究

研究課題名（英文）A Study of Japanese Writing Activities in Ancient Times based on Annotations of Kaifuso

研究代表者
高松　寿夫（Takamatsu, Hisao）

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：４０２８７９３３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の中心的事業は『懐風藻』の注釈の作成であった。共同研究として注釈作業を行い、討議を通して個人の考察を相対化しつつ、期間的にも比較的短期間で完了させるという、共同研究の利点を最大限に活かした、新しい『懐風藻』の全注釈を作るべく、都合11名のメンバーで研究会を継続的に開催した。途中、2020年度からの新型コロナウィルス感染症の流行によって、一時的に研究の中断や、研究会の開催方法の変更等を余儀なくされたが、2021年度の前半で、すべての詩文の検討を終了することができた。その後、研究会における討議の結果を反映させた注釈原稿の改稿や調整、とりまとめの作業段階に入っている。

研究成果の学術的意義や社会的意義
『懐風藻』の新たな全注釈の提供によって、問題点の多い内容について、研究者や一般読者の理解を助け、飛鳥時代～奈良時代前半（7世紀後半～8世紀半ば）の日本漢詩文へのアプローチを現状より容易にすることが可能となる。注釈の作成にあたっては、近年様々に充実しつつある漢詩文のデータベースを利用しつつ、従来以上に用例を丁寧に洗い出すことを重視したので、用例に裏付けられた適切な解釈を示すことができた。

研究成果の概要（英文）：　The main work of the study was creating annotations of Kaifuso. Eleven members in all worked on annotations as a cooperative study and continuously held workshops in order to publish a new complete commentary of Kaifuso, after reviewing each consideration relatively and completing them in a comparatively short period by taking maximum advantage of cooperatively studying together.
On the occasion of the study, the new coronavirus epidemic which began in 2020 obliged us to suspend the activities temporarily or change how our study group would proceed, but we could finish reviewing all prose and poetry in the first half of 2021. After that, we have been working on the summarizing stage, as well as revising or adjusting the commentaries to apply the results of the study group's discussion.

研究分野：日本上代文学

キーワード：懐風藻　日本上代の文筆活動　詩序　漢文伝　日本漢詩　日本漢文

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

文学研究とは、各時代に文字で書き留められたテキストを分析の対象とする。そして、平仮名・片仮名が用いられるようになる以前の日本上代（奈良時代以前の日本）では、漢字こそが日常的に利用できる唯一の文字であった。つまり日本上代文学の研究において基本的にして非常に重要な課題として、その時代の文学を担った人びとが、どのような媒体によって漢字・漢文を学習していたのか、学習によって得た知識をどのように駆使したか、そして、それらの漢字・漢文をめぐる知的な実践が、どのように社会で共有されていたかといった事柄を、なるべく具体的に明らかにすることが求められることになる。このことを目的とした研究は、これまでにも積み重ねられてきている。しかし、漢詩文の電子化等の環境が急速に整いつつある昨今、今こそこの課題について、共同研究による集中的な検討が行われるべき時期であると考える。日本上代の文筆の担い手たちの精華のあらわれのひとつである『懐風藻』に精緻な注釈を施すことで、日本上代の文筆のあり様が捉えられるであろうと考えた。

２．研究の目的

本研究の目的は、第一に『懐風藻』の全注釈の完成にある。しかし、それは単に新たな注釈書の公表というだけの意義にとどまらない。『懐風藻』の詩の作者は、天皇・皇族・官僚・僧侶といった地位の人びとであるが、彼らは漢詩以外の文筆にも携わっていた。官僚であれば行政文書に関わったであろうし、法令等の編纂に従事した人物も少なくない。『万葉集』に和歌や漢文を遺す者もおり、僧侶であれば当然、仏教の言説に関与したはずである。これまでの注釈作業をとおしても、日本上代の他のジャンルの言説と深くつながる語句・表現が多く見出せており、つまりは『懐風藻』という窓をとおして、日本上代の文筆のあり様が浮かび上がってくるのである。近年、漢籍等の電子化によって語句の用例の網羅的検索が比較的容易に可能となった。それにより、特定の依拠テキストが限定できるのであれば、そこから作者の語彙獲得のルートや方法といったものが具体的に跡付けられる。しかしもちろん、ある語句について特定の典拠が求められない場合も多い。その場合も、その語句を共有する範囲に、特定の階層性や時代性といった傾向が認められるのであれば、そこにも日本上代の文筆のあり様の一端がうかがえることになる。また、同時代の中国（唐）の文筆との状況の共有といった事態が指摘できる場合もある。多様な状況をグループによる共同研究で具体的に検証し、その成果を注釈書の刊行によって、広く学界・社会に提供し、今後の関連諸研究に資することを期す。

３．研究の方法

「１．研究開始当初の背景」「２．研究の目的」において、「漢詩文の電子化等の環境」のことに言及したのは、電子データベースの利用では、特定の漢語表現の用例の検索が容易になったばかりではなく、これまで関係が想定されてこなかったような意外な文献が、非常に重要な影響を与えていたことが明らかになることが少なくないからである。一例を示すのであれば、『懐風藻』の序文では、天智天皇の時代が理想視されているが、その記述の中で、天智天皇の文学（学問）観を伝える文言として「調風化俗、莫尚於文、潤徳光身、孰先於学（風を調(ととの)へ俗を化(すす)むることは、文より尚(たふと)きことは莫(な)く、徳を潤(ぬ)らし身を光(て)らすことは、孰(いづれ)か学より先ならむ)」とある（訓は日本古典文学大系による）。『懐風藻』の文学観をも端的に表明したくだりと考えられるが、この１６字は、実は唐太宗の発言をそのまま利用したものであったことを、研究代表者はかつて発見した（論文「『懐風藻』序文にみる唐太宗期文筆の受容」『万葉』218、2014 年）。問題の唐太宗の言説は、現存資料では『冊府元亀』にのみ掲載の記事で、従来の文学研究ではほぼ参照されることがない箇所であった。この発見も、大部の文献である『冊府元亀』（全 1000 巻）が電子データ化されたために可能となったものであった。この発見からは、引き続き『懐風藻』撰者がなにによってこの言説を知ったか、それをこのように利用することが、どのような意味を持っていたかといった事柄に問題は発展して行く（前記論文参照）。そのような、依拠資料の発見（特定）・受容経路の検証・文筆の担い手の利用意識といった事柄を、順を追って検討・解明する作業の積み重ねが、この時期の文筆活動の実態を理解することにつながるものと考える。

同様の作業は、もちろん詩に対する注解作業でも繰り返されることとなる。やはり研究代表者は、安倍広庭「春日侍宴応詔」詩が、虞世南「奉和献歳讌宮臣」詩に基づく表現が多いことを指摘した（「万葉歌人の漢詩」『国学院雑誌』116-1、2015 年）が、虞世南の当該の詩がこれまであまり注目されなかったのは、『全唐詩』の本文に拠っていたためで、本文に小異がある『初学記』所収の本文に拠ることで、安倍広庭詩との類似が際立つことが了解されるのであった。この事例からもわかるように、文学研究においては、諸本による本文の相違に敏感である必要がある。

ことは、『懐風藻』そのものの本文校訂、そのための諸本の系統や性格の把握といったことにも当てはまる。『懐風藻』の諸本研究は、これまでもある程度の試みはなされてきたが、この数年間における土佐朋子（本研究の分担研究者）の一連の調査・研究は、それを飛躍的に高い水準に押し上げたといってよい。大谷雅夫「大津皇子の臨終の歌と詩」（『国語と国文学』93-1、2016

年）では、「近年ようやく『懐風藻』にも本格的な諸本研究が始まり、小島〔憲之〕・金〔文京〕氏らが参照できなかった知見が得られるようになった」（〔　〕内を補った）としたうえで、もっぱら土佐氏による『懐風藻』本文研究の成果を紹介しつつ、大津皇子「臨終」詩の第４句を「此夕誰家向」とするのは後世の合理化本文で、『懐風藻』の本文としては「此夕離家向」を採用すべきことを説いている。これで新しい注釈作成にふさわしい本文研究の条件も整ったといえる。

さて、注釈の作成作業であるが、これまでに単行本として刊行された『懐風藻』の注釈書は、いずれも個人によって著されたものであった。個人による注釈は、おのずから統一した方針に基づいた一貫性のある内容が期待できる利点がある。その一方で、一語一句に詳細な注釈を施すことを目指した場合、全注釈が完成するまでには、かなりの長い期間を費やさざるを得ないことになる（反対に、完成を急ぐあまり、用例の吟味が粗雑になったり、考察が不充分なものとなる危険性が高くなる）。これに対し、グループによる共同研究として注釈作業を行えば、完成までに費やす時間は、格段に短縮できる。もちろんその一方で、碩学による単独作業のような一貫性や水準の高さの維持には、おのずから問題も生じる。しかし、共同討議を行うことで、個人の考察は相対化され、より客観性が担保された注釈が期待できるという利点もある。共同研究の利点を最大限に活かした、新しい『懐風藻』の全注釈を作るべく、本研究の研究代表者・研究分担者３名は、知己の若手研究者に呼び掛け、都合 11 名のメンバーで『懐風藻』注解の研究会をすでに継続的に開催し始めている（2015 年から、年間 10 回程度）。上述したような問題意識・観点を共有しつつ注解作業を順調に進めてきており、研究代表者・研究分担者による若手研究者への指導によって、一定の研究水準も図れるようになってきている。諸本研究を踏まえた『懐風藻』本文の設定の仕方、語句の用例検索に必要な手順、集まった用例から注釈に必要な例を抽出するにあたっての観点などといった事柄について、共有すべき情報や知識も多く蓄積することができた。すでに『懐風藻』所収の詩については、過半の検討を終えた。そこで、これまでの共同研究の成果を学界に問うべく、『早稲田大学日本古典籍研究所年報』11（2018 年）に、８首分の注釈を公表した。この成稿作業をとおして、書式の統一等に一定の方針を得ることが叶い、今後の共同研究の推進によい見通しが得られた。年報は多くの関係者に配布したが、おおむね好評によって迎えられたようである。本科研費研究申請の時点で共同研究はすでに４年目に入っており、このペースで進めれば、近い将来確実に、全注釈が完成できる見込みである。総序や詩序、作者伝といった散文（『懐風藻』には合計 16 の散文が収録されている）も詩の注解が一旦終了し次第、順次検討して行く。散文も含めたすべての注釈作業が完了の予定の後、改めてグループ内で討議した結果を反映させた注釈原稿の改稿や調整、とりまとめの作業をじっくり行い、刊行可能な原稿を仕上げることができるものと見込んでいる。本研究費申請は、その間の共同研究遂行に必要な経費の助成を求めたものである。

４．研究成果

本研究の核心的活動は、『懐風藻』の注釈作成であった。科研費助成を受ける以前からすでにその作業は始まっていたが、助成期間中に作成された注釈を、作成（研究会で検討した）順に示すならば以下のとおりである。（　）内は詩番号、〔　〕内は注釈作成担当者である。

・巨勢多益須「春日　応詔」（20）　〔李満紅〕
・石上乙麻呂「飄寓南荒贈在京故友」（115）　〔梁奕華〕
・同「贈旧識」（117）　〔顧姍姍〕
・吉智首「七夕」（56）　〔高橋憲子〕
・釈道慈「初春在竹渓山寺於長王宅宴追致辞」（104）　〔井実充史〕
・葛井広成「奉和藤太政佳野之作」（119）　〔土佐朋子〕
・同「月夜坐河濱」（120）　〔石丸純一〕
・釈道融「我所思兮在無漏」（110）　〔高松寿夫〕
・「山中」（番外 2）　〔井実充史〕
・藤原史「春日侍宴　応詔」（30）　〔李満紅〕
・石上乙麻呂「贈掾公之遷任入京」（116）　〔梁奕華〕
・同「秋夜閨情」（118）　〔顧姍姍〕
・吉田宜「秋日於長王宅宴新羅客」（79）　〔林宇〕
・釈道慈「在唐奉本国皇太子」（103）　〔荒川聡美〕
・民黒人「独坐山中」（109）　〔楽曲〕
・安倍広庭「秋日於長王宅宴新羅客」（71）　〔高橋憲子〕
・紀男人「七夕」（74）　〔李満紅〕
・藤原総前「秋日於長王宅宴新羅客」（86）　〔高松寿夫〕
・「歎老」（番外 3）　〔土佐朋子〕

以上の諸作品の注釈作成と研究会における検討を、2019 年 8 月までに終えた。これによって、『懐風藻』所収の詩に対してはひととおり注釈を終えたこととなる。その後、引き続き散文作品の注釈作成と検討に移った。

・『懐風藻』序　〔高松寿夫〕
・藤原万里「暮春於弟園池置酒」序　〔梁奕華〕
・「大津皇子伝」　〔土佐朋子〕
・「河島皇子伝」　〔井実充史〕

・「釈道慈伝」　〔石丸純一〕
・「葛野王伝」　〔高橋憲子〕
・「釈弁正伝」　〔李満紅〕
・「大友皇子伝」　〔高松寿夫〕
・藤原宇合「暮春曲宴南池」序　〔土佐朋子〕
・「石上乙麻呂伝」　〔顧姍姍〕
・「釈智蔵伝」　〔荒川聡美〕
・「釈道融伝」　〔楽曲〕
・下毛野虫麻呂「秋日於長王宅宴新羅客」序　〔高松寿夫〕
・釈道慈「初春在竹渓山寺於長王宅宴追致辞」序　〔井実充史〕
・藤原宇合「在常陸贈倭判官留在京」序　〔土佐朋子〕
・山田三方「秋日於長王宅宴新羅客」序　〔林宇〕

2020 年春に新型コロナウィルス感染症の感染拡大に伴い、一時的に研究会活動が行えなくなったが、程なくオンラインによる研究会に切り替え対応し、注釈作成の作業に大きな支障をきたすことなく、比較的順調に研究を進めることができ、2021 年 8 月に散文の検討もひととおり終えることができた。その後、担当者各自で、研究会における検討を踏まえた改稿作業に入り、その第一次改稿も、詩作品については 2021 年度末までにほぼ終えた。

引き続き改稿作業を進めつつ、2024 年度の注釈書刊行を目指している。『懐風藻』の新たな全注釈の提供によって、問題点の多い内容について、研究者や一般読者の理解を助け、飛鳥時代～奈良時代前半（7 世紀後半～8 世紀半ば）の日本漢詩文へのアプローチを現状より容易にすることが可能となると期待される。注釈の作成にあたっては、近年様々に充実しつつある漢詩文のデータベースを利用しつつ、従来以上に用例を丁寧に洗い出すことを重視したので、用例に裏付けられた適切な解釈を示すことができた。注釈作成を通して得た知見については、注釈担当者個人でその都度、学会報告や論文によって成果も公表している（「５．主な発表論文等」の項を参照）。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計14件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　8件）

１．著者名 高松寿夫	４．巻 14
２．論文標題 「養老改元詔」の語彙	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本文学研究ジャーナル	６．最初と最後の頁 21　31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 高松寿夫	４．巻 97-12
２．論文標題 大伴家持の「江南美女詠」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 国語と国文学	６．最初と最後の頁 3　16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 井実充史	４．巻 31
２．論文標題 上代日本漢詩文における「蘭亭序」受容の諸相 ： 葛野王詩、梅花歌序、家持・池主臥病贈答書簡を中心に	５．発行年 2020年
３．雑誌名 福島大学人間発達文化学類論集	６．最初と最後の頁 148　132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 土佐朋子	４．巻 14
２．論文標題 『日本書紀』大津皇子伝の意図 ： 「詩賦之興、自大津始也」の意味	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本文学研究ジャーナル	６．最初と最後の頁 32　44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 土佐朋子	4．巻 28
2．論文標題 性頗る放蕩にして法度に拘らず ：『懐風藻』大津皇子伝前半部における人物造形	5．発行年 2020年
3．雑誌名 京都語文	6．最初と最後の頁 103　120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 土佐朋子	4．巻 105
2．論文標題 太子の骨法これ人臣の相にあらず ：『懐風藻』大津皇子伝後半部における行心の「註誤」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 文学部論集	6．最初と最後の頁 29　40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 高松寿夫（〈革斤〉慧卿・訳）	4．巻 206
2．論文標題 日本古代辺境意識与自然的発現	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日語学習与研究	6．最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 高松寿夫	4．巻 240
2．論文標題 日本の律令官人たちは自然を発見したか	5．発行年 2019年
3．雑誌名 アジア遊学	6．最初と最後の頁 67-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 高松寿夫	4．巻 122
2．論文標題 「従来厭離此穢土」―憶良が基づいた仏教言説	5．発行年 2019年
3．雑誌名 上代文学	6．最初と最後の頁 15-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 高松寿夫	4．巻 68(5)
2．論文標題 「養老改元詔」をめぐって	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本文学	6．最初と最後の頁 2-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 井実充史	4．巻 30
2．論文標題 『懐風藻』紀末茂「臨水観魚」について―楽府詩の実験的改作という観点から―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 福島大学人間発達文化学類論集	6．最初と最後の頁 23-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 井実充史	4．巻 13
2．論文標題 釈道慈「初春在竹渓山寺於長王宅宴追致辞」について―沙門不敬王者論及び三論宗二諦論との関わりをめぐって―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 早稲田大学日本古典籍研究所年報	6．最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 土佐朋子	４．巻 27
２．論文標題 群書類従懐風藻の後代竄入詩―亡名氏「歎老詩」考―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 京都語文	６．最初と最後の頁 137-154
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 土佐朋子	４．巻 104
２．論文標題 「尋春不見春」詩偈流伝考―増殖する「探春詩／悟道詩」―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 文学部論叢	６．最初と最後の頁 39-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 高松寿夫
２．発表標題 ８世紀日本の漢文語彙―「懐風藻序」をとおして
３．学会等名 中日古典文学に関する研究（於北京大学）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 高松寿夫
２．発表標題 ８世紀半ばの日本における「江南」イメージ
３．学会等名 グローバルな視点からの浙江地域と日本の文化交流史研究（於寧波大学）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 高松寿夫
２．発表標題 ８世紀行政文書に見る漢籍受容
３．学会等名 東アジア知識交流のメカニズム：知識の生産と伝達（於早稲田大学）（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計3件

１．著者名 河野貴美子　高松寿夫	４．発行年 2020年
２．出版社 古典ライブラリー	５．総ページ数 120
３．書名 日本文学研究ジャーナル第１４号「特集・奈良平安の漢詩文」	

１．著者名 早稲田久喜の会（井実充史）	４．発行年 2020年
２．出版社 明治書院	５．総ページ数 248
３．書名 学びを深めるヒントシリーズ　枕草子	

１．著者名 土佐朋子	４．発行年 2021年
２．出版社 新典社	５．総ページ数 452
３．書名 校本懐風藻	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	土佐　朋子 (Tosa Tomoko) (00390427)	佛教大学・文学部・教授 (34314)	
研究分担者	井實　充史 (Ijitsu Michihumi) (20277776)	福島大学・人間発達文化学類・教授 (11601)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	荒川　聡美 (Arakawa Satomi)	早稲田大学・総合研究機構・招聘研究員	
研究協力者	石丸　純一 (Ishimaru Junichi)	早稲田大学・附属高等学院・非常勤講師	
研究協力者	楽　曲 (Yue Qu)	早稲田大学・大学院文学研究科・博士後期課程	
研究協力者	顧　サンサン (Gu Shanshan) (90802009)	東洋大学・法学部・専任講師	
研究協力者	高橋　憲子 (Takahashi Noriko)	早稲田大学・総合研究機構・招聘研究員	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	李　満紅 (Li Manhong) (60909951)	茨城大学・教育学部・助教 (12101)	
研究協力者	梁　奕華 (Liang Yihua)	広東外語外貿大学・日語語言文化学院・講師	
研究協力者	林　宇 (Lin Yu)	早稲田大学・大学院文学研究科・研究生	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関